

日本語の活かし方

福嶋隆史

メール、ブログ、Twitter、Facebook……
人類の歴史上、最も「読み書き」力が求められる時代に

一生使える
「日本語の技術」
を学ぼう!

日本語の活かし方

福嶋隆史

星海社

67



この本を手に行っているあなたは、今、日本語を読んでいます。

この文を、このページを、読むことができます。

あなたは、二〇〇ページを超える本を読みとおすだけの日本語力を備えています。

それは、価値あることです。

でも、このような本を手にするということは、実は何か悩みを抱いているのかもしれない。
せん。

話していて、言いたいことがうまくまとまらない。「どういうこと？」と聞き返される。
「話が長い」と言われる。

相手の話を聞いていても、よく整理できていない気がする。分かったふりをしている。
文章を読むのに時間がかかりすぎる。何度も同じところを読み直してしまう。

まして、書くのにはもっと時間がかかる。一向に、手が動かない。

そういったネガティブな感触が、多かれ少なかれ、日々のどこかで生まれているのではないだろうか。

高校生、いや、大学生までは、そのままでもよかった。

しかし、何らかの役割を担い、時間的制約の中で一定の「成果」を求められる立場にいる今、何とかしてその感触を、ポジティブなものへと変えていきたい……そう思い始めている。

そして、できるなら、言葉を自由に使いこなし、人生を豊かなものにしていきたい——。この本は、そんなあなたのために書かれた一冊です。

今や、誰もが書き手・読み手になることのできる時代となりました。インターネット、とりわけソーシャルメディアの普及が、そのことをはっきりと表しています。

書き手・読み手になることが「できる」というよりも、むしろそれを「強要される」時代、と言ったほうがよいかもしれません。ネット上でメッセージを受信・発信することができなければ、どんな職種であっても生き残れないのではないかと思えるような時代です。ネット上で受発信されるのは、書かれた文章だけではありません。そこには、音声によ

るメッセージのやりとりがあります。対話・会話を含む映像をネット上で見聞きする機会
は、とても多くなっています。

このように、私たちは、書き手・読み手であるのみならず話し手・聞き手であることも
同時に求められるという、なかなかシビアナ状況に置かれています。

シビアナ点は、ほかにもあります。

それは、不特定多数を相手にしなければならぬという点です。

物理的に近くにいる特定少数の人々とだけつながればよかったアナログな時代とは異な
り、遠く離れたところにいる多数の他人ともつながっていくことが当たり前になっている
のです。

まだあります。

それは、言語メッセージの質の幅が広がったということです。

受発信される情報が増えれば増えるほど、それは質的に玉ぎよくせきこんじょう石混淆ごうごうとなります。

ツイッター・フェイスブックなどのリアルタイムメディアでは文章を即時的に読み書き
することが求められるため、ここでは「玉」より「石」が目立ちます。つまり、知ったか
ぶり・分かったつもり文章が、あちこちに存在するのです。

しかし、多数の他者の中では、知ったかぶり・分かったつもりが、すぐ見抜かれてしまいます。チェックされる機会が増える分、ニセものは、気づかれやすくなっているわけです。書き手・話し手としては、これはシビアです。

一方、読み手・聞き手としては、逆にそういうニセものに騙されないように注意しなければなりませんから、その意味でも、やはりシビアです。

さて、このように厳しい状況を生き抜いていくためには、武器が必要です。最も強力な武器。

それは、「言語技術」です。「日本語力」と言いかえてもよいでしょう。

ところで、私は、横浜市で国語塾を開いています。

前職は小学校教師ですが、いつの間にかその年数を上回り、国語専門で教えてきた期間だけでまもなく一〇年になります。

対象は、小・中・高校生。週に一〇〇人近くの生徒を、日々指導しています。

私の塾は、国語を教える塾というよりも、思考の技術を教える塾です。

日本語による思考の技術です。

単なる「国語科」の枠を超えているため、中学受験が終わっても通い続ける生徒が、けっこういます。大学生になっても通い続けたいと話してくれた高校生もいます。

実は、ここが肝心なところですよ。

生活の幅が広がれば広がるほど、言葉の力を高めることの価値を自ら実感し始める。

あるいは、子どもから大人へと成長するにつれて、他人の言語技術と自身の言語技術との差に気づき始める。

言語技術とはどのようなものかが分かれば分かるほど、その実感は高まる。

そういうことなのでしょう。

その証拠に、最も切実なメッセージは、大人からこそ届きます。

ある親御さんは言いました。

「子どものノートを見ているうちに、私自身が、先生の塾の生徒になって学びたくありません」

「大人向けの講座をやってもらえませんか」

「私自身が、今、先生の本で学び直すことに夢中になっています」

同様に、こういう声もよく届きます。

「小学生版と書かれた問題集でしたが、三〇代の私にもすごく手ごたえがありました。大人版をぜひ出してください」

「講師バイトで国語を教えています、教材はもうこれを使うしかない、と思いました。ちよつと前まで自分が習っていたこと、教えていたことが何だったのかと思うくらいです」本の読者からの感想です。

そんな声をいただくようになってから、大人向けの本を書いたり、大人向けのセミナーを開いたりするようになりました。

さらには、人材育成に関わる大手企業から研修講師として呼んでいただいたり、理系の大学生向けに講演をしてくれと依頼されたりといったことも増えてきました。

そういった中で、私は確信を持ちました。

大人こそが、言語技術の不足を自覚し、その習得を願っている。

とりわけ若者——広い社会に出て、他者と円滑にコミュニケーションをとるための能力の必要性を痛感し始めた方々は、そういう面でかなりの不安を抱いている。

そして、そんな方々にとって必要なのは、学校の国語教科書に掲載された名作の数々ではなく、塾の読解テキストに羅列された入試過去問でもなく、複雑で難解な論理学を紹介

した本でもない。

私が生徒に日々教えているような、シンプルで奥深い言語技術。

日本語を的確に使いこなし、それによって思考を整理するための明快な方法。

それこそが、求められている。

そのような確信の中で、この本も生まれました。

言語技術とは、すなわち、発信の技術と受信の技術です。

発信とは、話すこと、書くこと。アウトプットです。

受信とは、読むこと、聞くこと。インプットです。

ここぞというときに力強いスピーチをできる人に出会おうと、心ひそかに憧れてしまう。自分自身も、何とかしてもう一步上に進みたい。

手元に届いたメールが整理されていて分かりやすいと、感心するとともに、悔しくもなる。こういうメールを書けるようになりたい。でも、必要なのはメール術というより、書く力そのものだと思う。何とかして、それを学びたい。

もっとスピーディーに、かつ正確に、書類を、記事を、本を読むことができれば、きつ

と人生が豊かになる。読む力を、高めていきたい。

もつと相手の話をうまく聞き取れる人間になりたい。そして、コミュニケーション力を高めたい。「なるほど」というひとことでごまかすのは、そろそろ終わりにしたい。

あなたのそんな前向きな気持ちをあと押ししてくれるもの。

そして、実際にあなたを明るく未来へと導いてくれる、確かな根拠。

それが、言語技術なのです。

ところで、ここまで何度か登場した「日本語」という言葉。「国語」との違いは、どこにあるのでしょうか。

あるいは、「技術」という言葉。技術とは、いったいどのようなものなのでしょうか。

まずはそのあたりから、整理していくことにしましょう。

目次

はじめに 3

第一章 「技術」とはどのようなものか

15

「国語」と「日本語」 16

「技術」の反対語は？ 20

「センス」にサヨナラ 23

「型」が個性を引き出す 27

第二章 日本語を活かすための言語技術

31

「理解」の本質 32

言いかえる・くらべる・たどる 39

論理的思考を支える三つの「公式」 47

なぜ「三つ」なのか？ 58

第三章 「書く」ための言語技術 63

天声人語の書き写しは役立つのか？ 64

文章設計の黄金パターン 67

視覚的比喩で言いかえる 72

「五感」への意識が比喩力を高める 78

比喩の落とし穴 82

具体例を挙げるにもコツがある 89

「サンドイッチ型」の文章を心がける 95

文中・文末接続語とは？ 101

「違いが分かる男」 113

「震度」と「ルクス」の共通点は？ 119

書くことは「自分」を創ること 125

第四章 「読む」ための言語技術 129

「見た」のか「読んだ」のか 130

「読み」とは「再構築」である 132

「対比の骨組み」を見つける技術 135

「恥ずかしい」の反対語は？ 146

他人の文章が分かりにくい理由 153

「なぜ？」に答えるとき、つい見逃してしまう要素
ツッコミの技術を磨く 168
159

第五章 「話す・聞く」ための言語技術 179

音声言語ならではの特徴 180

イチローのように話すには 182

「て」に頼るなかれ 189

話の途中で割り込まれないようにする技術 195

あなただけの反対語を生み出す 202

たとえばこんなスピーチ 215

永久に続くリアルタイム・コミュニケーション 219

第一章 「技術」とはどのようなものか

「国語」と「日本語」

あなたは、英語は得意ですか。

得意です。まあまあです。あまりできません。全然ダメです。

どのレベルであれ、だいたいこの答えを出せたでしょう。少なくとも、回答可能な問いだつたはずですよ。

では、あなたは、日本語が得意ですか。

この問いには、ちよつと面食らうでしょう。

得意とか不得意とか、そういうことを考えたことはないけど……。まあ、人並みには使えていると思いますが……。

多くの日本人は、この程度の答えしか出せないはずですよ。

なぜ、そうなるのでしょうか。

簡単に言えば、「体系的に学んでこなかったから」ということになります。

英語では、単語の意味を覚え、イディオムを覚え、一文から二文へ、二文から三文へ、そして徐々に長い文章へと移行しながら読み書きを練習し、あるいは、同様のステップで英会話をレッスン……というように、体系的に学んできました。

日本語では、どうでしょう。

小学生になる頃には、おおまかに話せるようになっていた。そして、おおまかに話せば済むような国語の授業を受け、おおまかな読み書きができるようになった。

中学でも、おおまかに読み書きができれば曲がりなりにも授業についていけた。

高校時代の受験勉強はさすがに難しかったけれど、国語は対策のとりようもなく、結局はおおまかな力のまま受験し、あとは運任せだった。

そして、もはや「国語科」を学ぶこともない大学時代を経て、今に至る。

どの段階でも、体系的な日本語の運用法を習得してこなかった。もちろん国文法は習ったが、その知識を発揮しなくてもおおまかに話したり読み書きしたりできたから、国文法の勉強は必要性の薄い単なる苦行のような記憶でしかない――。

つまり、日本人に対する日本語教育、否、国語教育というのは、いわば「形」がないままに行われてきたのです。

いつの間にか、おおまかにできるようになっていた。それで通用してきた。

言語としての「形」を、はっきりとつかまえたことがない。

だから、「日本語が得意」とはどういう状態を指すのか、分からない。

「形」があれば、どの部分が欠けているか、逆にどの部分が整っているかが見えるのだが、それがないから、見えない。

そもそも、「日本語が得意か」と問われて初めて、見えていなかったという事実気づかされる。

これが、多くの日本人の現状なのではないでしょうか。

ところで、先ほどこう思ったかもしれません。

「国語は得意ですか、と問われれば、答えられたんだけど」

ここで言う国語とは国語科のこと。その点数の記憶をもとにすれば答えられる。そういう意味でしょう。

しかし、国語科の点数が高かった人も、「日本語が得意だ」とは言い切れないのではないのでしょうか。同様に、国語科の点数が低かった人も、「日本語が苦手だ」と断言するのは、どこか違和感が残るはずです。

この感覚は、「国語」と「日本語」が一致していないことを示しています。

国語と日本語は、どう違うのか。

それは、算数とくらべることで説明できます。

算数は、形ある技術を積み重ねるように習得していきます。

四則計算。面積・体積。確率。最小公倍数・最大公約数……等々。

それぞれに、公式すなわち普遍的技術がありました。

ところが、国語はどうでしょう。物語文。説明文。詩。作文。あるいは討論。

それらは、技術ではありません。技術の「対象」にすぎません。

では、「日本語」はどのようなのでしょうか。

そこには、形ある技術があります。算数と同じです。

ただし、その内実はあとから紹介します。

ともあれ、国語と日本語の違いは、体系的技術の有無です。

今からでも遅くありません。

体系的な言語が元来持っているはずの「形」を、学んでいきましょう。

かといって、難しい日本語文法の話を展開するわけではありませんので、安心してくだ

さい。

この本は、日本語そのものの習得というより、「日本語による思考の技術」の習得を指す本です。

その意味は、まもなく分かってくるはずですが。

「技術」の反対語は？

さて、ここまで何度も、「技術」という言葉を使いました。

技術とは、どういうものですか。

ある言葉の意味を考えると、それを浮かび上がらせる方法は二つあります。

一つは、具体化すること。もう一つは、反対語からアプローチすることです。

まず、具体化しましょう。

調理技術。建築技術。医療技術。演奏技術。プログラミングの技術。

共通点は、何でしょうか。

それは、「学習できる」ということです。初めてその世界に足を踏み入れた初心者であっても、その技術を学習し、同じように再現すれば、一定の成果を上げることができる。これが、技術です。

さて、次に反対語を考えます。

技術の反対語は、何でしょうか。

反対語というものは、対比の観点(軸)を何にするかによっていくらでも想定可能ですが、ここでは、「芸術」としてみましょう。

技術……真似できる

芸術……真似できない

真似できるかどうか。これが、対比の観点となります。

「イチローのバッティングは芸術的だ」と言うとき、そこには、「真似できないほどのレベルに達している」という意味が隠されています。もちろん、必ずしもハイレベルなものである必要はなく、「うちの二歳の息子が描いた絵、芸術的なよ」と言うときのように、ハイレベルかどうかは分からないがとにかく真似できない要素を持っている、というときにも、芸術という言葉を使います。

ここで、先の「学習できる」を思い出してください。

「学ぶ」の語源は、「真似ぶ」です。

学習できるということは、真似できるという意味と同じです。

そんなわけで、一つの結論にたどり着きました。

真似できる。再現できる。それが、技術というものの本質なのです。

その意味で、技術とは、「型」「方法」などと言いかえることもできません。

ここで、話を言語に戻します。

言語技術。それは、真似できる技術です。

真似できる。学習できる。

そして、真似できるものは、「使う」ことができる。

ひるがえって、学校の国語科は、どうだったのでしょうか。

毎日のように国語の授業があった。でも、何を学んだのか、分からない。真似できる技術を身につけた覚えもないし、それを使って何かを成し遂げた記憶も、もちろんない。

一方、塾の国語の授業では、ただひたすら文章を読み、問いを解いただけ。

実は、生徒だけでなく先生たちも、困っているのです。

国語力をつけたい。どうすればいいですか。

学校や塾の先生に対してそう相談しても、返ってくる答えは、お決まりのものばかりで

した。

「とにかく、本を読みなさい。読書量が足りないからできないんです。読み続ければ、そのうちできるようになります」

「国語力っていうのは、感覚的なものだからね。結局、たくさん読んだり書いたりすると。量を増やすこと。そうやって、センスを磨くしかないよ」

「国語で点数を取りたいなら、まず漢字を頑張りなさい。え？ 読解力？ それは、新聞を読むとか本を読むとかして、幅広い知識を吸収するしかないよ」

こういうセリフから分かるのは、教師たちですら言語技術に対する意識がほとんどなく、内心では解決策を持たず困っていたのだろうということです。

教師が持っていない意識を、生徒が持てるはずがありません。

教師が持っていない解決策を、生徒が獲得できるはずありません。

「センス」にサヨナラ

国語力について世間で語られるときに頻出する「センス」という言葉。

その正体は、先に述べた「芸術」なのだと解釈することができます。

ここで、あらためて技術と芸術の違いを整理しておきましょう。

〈技術〉

真似できる

形式的

理性的

分析的

〈芸術〉

真似できない

内容的

感覚的

総合的

学校教育における国語の授業では、「内容」が重視されます。

私はこれを、「形式」重視に切り替えるべきであると訴え続けています。

内容とは、「何を読むか・何を書くか・何を話すか・何を聞くか」。

形式とは、「どう読むか・どう書くか・どう話すか・どう聞くか」。

たとえば、小学校の国語授業で、名作「ごんぎつね」を読んだとします。

そのときに重視されるのは、登場人物「ごん」や「兵十」^{ひょうじゅう}の心情の推察であり、その先

にあるのは、作品全体を総合的・感覚的に「味わう」ということです。

心情の推察それ自体は有益なこともあります。その作業をとおして、その推察の「技術」自体を学ぶ方向へと授業が進んでいくことは、きわめてまれです。結局は、「いいお話だったねえ」で終わるのです。

中学・高校と進むにつれ、説明的文章、特に評論文の比重が増えますが、それとて、内容重視です。人間関係について述べられた文章ならば、人間関係構築における価値観を教師が熱心に説明して終わる。これは、道徳の授業です。何らかの生物の特徴について述べられた文章ならば、その生物についての理科的知識を整理する作業に時間を取られて終わる。これは理科の授業です。情報化社会について述べられた文章ならば、その社会情勢について調べたり学んだりして終わる。これは社会科の授業です。

どんな文章を読もうとも、そこに共通して存在するはずの言語技術を抽出して一般化するということがない。他のあらゆる思考場面に適用可能な言語技術を、明確に、輪郭を示しながら生徒に与えてくれる先生は、ほとんどいない。

以上は「読み」についてですが、「書き」でも全く同じです。

教師たちは、文章の書き方を教えてはくれませんが、あくまでも、書かれた文章を全体的・総合的に判断し、その内容の良し悪しを語るだけです。

「きみの文章の内容にはあまり納得できないが、形式は整っているね。この部分とこの部分の接続語の使い方が素晴らしいね」

こんな評価を受けることは、めったにありません。

「どんなに形としてうまく書いていても、書かれている内容が全体としてダメなら、ダメなんだよ」

こういう言い方をされることが、多かつたはずです。

教科書に掲載された文章の芸術性。

生徒が書いた文章の芸術性。

その芸術性を、総合的・感覚的に高めていこう。

そんな無茶な要求をするのが、学校における国語教育なのです。

そして、そんな教育しか受けたことがなかった人々が、大人になり、「国語というのは結局はセンスだよね」などと、わけ知り顔で語るのです。

そんな、不透明で手ごたえのない国語とは、サヨナラしましょう。

この本は、クリアで手ごたえのある国語、真似して使うことのできる形ある国語を、あなたに提供します。

それは、国語科の領域を超えた、「日本語による思考の技術」の世界です。

「型」が個性を引き出す

ここまでをお読みになり、あなたは、こう感じたかもしれません。

「いや、芸術も大切なんじゃないの？」

それはそうです。

どんなバッターも、イチローのような芸術的バッティングをしたいはずです。

大切なのは、順序です。

まず技術。その先に、芸術。これが、正しい順序です。

イチローだって、過去、見えないところで、地道な技術的トレーニングを積んだに違いありません。その先で初めて、あの芸術的バッティングが生まれたのです。

どんな分野であれ、最初から芸術の領域に到達することはできません。

ただし、その分野の裾野が広がれば広がるほど、「技術」の段階を経ていないにもかかわらず「芸術」を備えたプロの顔をして登場する人が目につくようになります。

最も分かりやすいのは、「芸能人」です。

語義からすれば、「芸能」とは「芸術を使いこなす能力」です。ここで言う芸術とは、真似できないレベルに達した技術の総体を意味します。

しかし、そういうレベルの技術を持たないにもかかわらず、ちょっと個性的であるというだけで、「芸能人」として世に出てくる人がいます。

彼らは、しばらくの間は流行語大賞を取ったりしてちやほやされますが、いつの間にか消えてしまいます。技術を備えていなかったからこそ、末路です。

今、「個性的」と書きました。

個性とは、「他と違う性質」のことです。

芸術の領域に達した「本物」の人たちは、皆、個性的です。

真似に真似を重ね、技術を積み上げたからこそ、真似できない個性を体得できたのです。これは逆説的ですが、論理的です。

すぐに消えてしまうような個性で目立ちたいだけならば、言語技術を学ぶ必要もありません。思いつきの言葉で、思いつきの文章を綴るつづなどしていけばよいでしょう。

しかし、他者から真に評価されたいのならば、まずは、真似することです。技術のトレーニングを、これでもかというくらいに積むことです。

型・方法・技術は、個性をつぶしません。むしろ、個性を引き出すものなのです。

折しも、教育界では「人間力」などという言葉が跋扈ばっこし始めています。

目に見えない無形の「力」であるにもかかわらず、あたかも意図的に高められる能力であるかのごとく、語られています。

人間力などという、包括的で曖昧あいまいな「芸術」の領域を、最初から目指してはいけません。分析的で明確な「技術」の領域から、始めましょう。

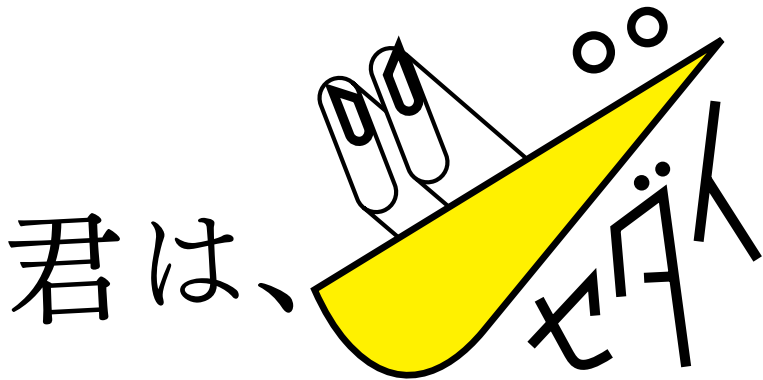
もし「人間力」なるものが上がることがあるとすれば、それは、そういった技術の積み重ねの先でしか、起り得ません。それは意図的に獲得可能な能力ではありません。地道に、一步一步技術を磨くうちに、いつの間にか「人間力」が高くなったと周りに言われるようになった。その程度の話なのです。

さて、前置きはこのくらいにしましょう。

いよいよ、その「技術」の内実に足を踏み入れます。

向学心のあるあなたは、必ず変化・成長を遂げることができます。

努力が正当に報われる領域。それが、言語技術なのです。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!